

1. テキスト

「内部知覚について」106頁3行目から106頁10行目まで。

2 テキスト要約

「三」以降、論理的主体、形而上学的本体、認識主観の関係が問題となっている。「三」では論理的主体と形而上学的本体の関係が論じられた。主体は第一実体ではなく第二実体、即ち「一般的なるもの」だというのがその結論である。この主体は述語以前の主体であり、判断以前の直観であり、「判断とは一般的なるものの内面的発展」(103)である。今後は主体と主観の関係を論ずるべきであるが、それに先立って「知的主観」ではなく、「働くもの」と主体との関係を論ずるといっているのである。「知的主観」は「考える」こと、「働くこと」は「見る・聞く」が念頭に置かれている。「見る・聞く」が「純なる作用」つまり直観となる時、「性質的なるもの」つまり述語なき主体が「自分の上に立つ」という。

第三段落からはいよいよ「認識主観」が問題となる。「何等の意義に於ても、有の意義を付加することのできない主観は主観ではない」とされる。念頭に置かれているのは「何等の心理的意義を有せない認識主観」や「単に認識対象界の統一」とあることから、カントの超越論的統覚であることは明らかである。とはいえ認識主観はどこまでも客観とならないということは認めなければならない。

3. 哲学的問

「悪は存在するか」